

## 直接話法の意図的な使用

—トーマス・マンの『トニオ・クレーガー』の一節による検証—

中 島 伸

### 1. 問題提起

本論文で扱うトーマス・マンの『トニオ・クレーガー』などのドイツ文学作品では、語り手の発言・思考内容を示す手段として、直接話法、間接話法、そして体験話法などの引用形式が用いられ、作家はこれらの引用形式を駆使して作品を執筆している。そこで問題となるのは、文学作品における引用形式の使い分けである。例を挙げるとすれば、なぜトーマス・マンは『トニオ・クレーガー』の中で次の(1)と(2)の傍線部のような直接話法で示しているのかという点である(本論文における用例中の傍線は筆者によるもので、引用文は全て現正書法に改めている)。

- (1) »Ja«, sagte er (Tonio) , »man isst überhaupt zu schwer hier oben. Das macht faul und wehmütig.«  
»Wehmütig?« wiederholte der junge Mann und betrachtete ihn (Tonio) verduzt...  
»Sie sind wohl fremd hier, Herr?« fragte er (der junge Mann) plötzlich...  
〈Thomas Mann: Tonio Kröger[7.] (2004:S.298)〉
- (2) »Übrigens werde ich nächstens »Don Carlos« lesen! « sagte er (Hans) rasch.  
〈Thomas Mann: Tonio Kröger[1.] (2004:S.254)〉

これについては、以前カフカの『審判』の一節を基にして、引用形式における語り手の視点から見たダイクシス表現の転換の有無、そして導入文の有無という点から、3つの引用形式の文体的効果の差が生じるのではな

いのかという結論に至った<sup>1)</sup>。その後、多方面から検証した結果、ダイクシスの転換や導入文の有無だけではなく、引用形式に備わっている機能や導入文に関する語学的な要素からも3つの引用形式の文体的効果の差が生じることが考えられる。

本論文ではまず指示表現、直接話法と間接話法の機能と形態的特徴、そして直接話法から間接話法へ転換可能な文と不可能な文について言及する。これらの言及内容から、引用形式の文体的効果を解明する手段として、まず引用形式の基となる直接話法の文体的効果について触れ、作者であるトーマス・マンが(1)と(2)の一節で意図的に直接話法を使用していることについて検証したい。

## 2. 指示表現

言語テキスト内で用いられる語彙には、名詞、動詞、そして前置詞などの形式と意味の恣意的な対応に基づく辞書的な意味を持つ語彙だけではなく、指示することによって基づく語彙が存在する。なお、この指示的な語は照応的な語彙と直示的な語彙の2種類に区分される。

### 2.1 照応的な語彙

照応的な語彙とは言語テキスト内で指示対象がどれであるか理解できる語彙のことで、3人称の人称代名詞 *er, sie, es* と指示代名詞 *der, dieser, jener* などが属する(本論文における用例中の点線は筆者による)。

(3) Ich habe den Roman gelesen. Er gefällt mir sehr gut.

〈国松他 [編] (1990:648 頁)〉

(4) Dieser Tisch ist kleiner als der meines Freundes.

〈国松他 [編] (1990:483 頁)〉

上記の(3)の傍線部 *Er* は前の文中の点線部の男性名詞 *Roman* を指示する機能を持ち、(4)の傍線部 *der* は点線部の男性名詞 *Tisch* を指示する。

### 2.2 直示的な語彙

直示的な語彙とは、言語テキストの外に存在する言語テキストが生み出

された特定の発話場面を基準にした指示表現のことであり、このような表現のことをダイクシス表現と言う。ダイクシス表現に属する少数の語彙は発話の行われる基本条件である „ich-jetzt-hier“ に対応して、人称のダイクシス・時のダイクシス・場所のダイクシスという3つに区分して扱うことが出来る。

### 2.2.1 人称のダイクシス

人称のダイクシスには1・2人称の人称代名詞 ich, du, wir, ihr, Sie と1・2人称の所有冠詞 mein, dein, unser, euer, Ihr が属する。これらの語は発話場面における特定の語り手と特定の聞き手を示す機能を持ち、名詞の代理という機能を持たない。次の(5)の傍線部 du は特定の聞き手、傍線部 ich は特定の語り手を示し、発話の場に居合わせていれば、先行表現や先行文脈を必要とせず、いきなり使っても誰を指示しているのかが分かる。

(5) Lernst du Deutsch? – Ja, ich lerne Deutsch.

### 2.2.2 時のダイクシス

時のダイクシスには次の(6)から(8)の傍線部 heute, gestern, morgen などが属する。

(6) Die Vorlesung heute fällt aus.

〈岩崎 (1998:554 頁)〉

(7) Gestern hat es den ganzen Tag stark geregnet.

〈岩崎 (1998:483 頁)〉

(8) Ich fahre morgen nach Sendai.

〈岩崎 (1998:812 頁)〉

一般的に、時点とは語り手が2つの事象を前提にして、基準となる事象ともう1つの事象が起こる「前」、「同時」、「後」という相対的順序によってしか考えることが出来ないと分析される。時のダイクシス表現の1つとして、基準となる事象が語り手の発話行為そのものであるケースがあり、本来なら次の(6)から(8)のように、点線部の語り手の発話行為を示

す „Ich spreche“ を導入文とする直接話法の形になる。

(6) Ich spreche: „Die Vorlesung heute fällt aus.“

(7) Ich spreche: „Gestern hat es den ganzen Tag stark geregnet.“

(8) Ich spreche: „Ich fahre morgen nach Sendai.“

しかし、時のダイクシスでは語り手の発話行為が言語テキストの外に存在するため、(6) から (8) の言語テキスト内には、語り手の発話行為を示す „Ich spreche“ という導入文が存在しない形となる。このような文で使われる時点を示す副詞のことを時のダイクシスと言い、(6) の heute、(7) の gestern、そして (8) の morgen はこれら3つの用例、すなわち言語テキストを述べている語り手の視点から見た時の表現となる。要するに、(6) の「今日の講義は休講だ」という内容は発話行為と同時に起こる事象、(7) の「昨日は一日中雨が激しく降っていた」という内容は発話行為よりも前に起こった事象、そして、(8) の「明日仙台へ行く」という内容は発話行為よりも後に起こる事象を示すことになる。

### 2.2.3 場所のダイクシス

場所のダイクシスには hier, dort, da などが属する。hier と dort は共に語り手のいる場所を基準とした位置規定の表現であり、hier の指示領域は語り手に近い場所、dort は語り手から離れた場所を示す。そして、da も語り手のいる場所を基準とした位置規定の表現であり、指示領域は聞き手に近い場所を示す。

(9) Hier steht ein Junge, und dort sitzt ein Mädchen.

〈岩崎 (1998:560 頁)〉

(10) Darf ich da sitzen?

〈国松他 [編] (1990:445 頁)〉

上記の (9) では、Junge は語り手に近い場所に、Mädchen は語り手から離れた場所にいることが示され、(10) の da を含む文は、語り手が聞き手に近い場所に腰かけていていいのかどうかを聞き手に尋ねていることを

示している。

### 3. 直接話法と間接話法

まず、引用という現象が成立する条件についてだが、これは言語テキストを生み出した発話場面の他に、更にもう1つの発話場面がはめ込まれるという二重構造を描写する場合に成立する。本章では、直接話法と間接話法の機能と形態的特徴について述べる。

#### 3.1 直接話法

直接話法は言語テキストを生み出した発話場面の言語テキストにはめ込まれたもう1つの発話場面の言語テキストが、引用符という特別の記号によって示される。要するに、登場人物の発言・思考内容をそのまま聞き手に伝える機能を持っているため、2つの発話場面の間のダイクシスにずれは生じない。

(11a) Hans behauptet: „Ich habe davon nichts gewusst.“

(12a) Hans behauptet: „Morgen regnet es.“

(13a) Hans behauptet: „Ich habe hier nichts zu tun.“

〈Klosa (1998:S.779)〉

(11a) の傍線部 Ich, (12a) の傍線部 Morgen, そして (13a) の傍線部 Ich と hier が直接話法の語り手 Hans の視点から見たダイクシス表現となる。また、定形の法は (11a) と (13a) の点線部 habe, (12a) の点線部 regnet のように直説法の現在となる。

#### 3.2 間接話法

間接話法は引用符によって示されている直接話法が言語テキストを生み出した発話場面の言語テキストとして示される。そのため、人称・時・場所のダイクシス表現は直接話法の語り手の発言・思考内容を再現する間接話法の語り手の視点に転換されることになっている。

(11b) Hans behauptet, dass er davon nichts gewusst habe.

(12b) Hans behauptet, dass es am nächsten Tag regne.

(13b) Hans behauptet, dass er dort nichts zu tun habe.

〈Klosa (1998:S.779)〉

(11b) の傍線部 er, (12b) の傍線部 am nächsten Tag, そして (13b) の傍線部 er と dort が Hans の発言内容を再現している間接話法の語り手の視点から見た表現となる。また、定形の法は (11b) と (13b) の点線部 habe, (12b) の点線部 regne のような接続法となる。

ところが、本章で挙げた (11a) と (11b), (12a) と (12b), そして (13a) と (13b) の Klosa (1998:S.779) や、次の (14a) と (14b) の Helbig/Buscha(2001:S.179), そして (15a) と (15b), (16a) と (16b) の Engel(2009:S.69) のように、間接話法中の時と場所のダイクシス表現に関しては転換を明示している文法書もあれば、そうではない文法書もある。例えば、Schultz/Griesbach (1962:S.79) のように (17a) と (17b), そして (18a) と (18b) を挙げて、場所のダイクシス表現のみ転換することを示している文法書もあれば、Heidolph u.a. (1981:S.823) のように (19a) と (19b) を挙げて、時と場所のダイクシス表現の転換を不要としている文法書もある<sup>2)</sup>。

#### ① 時と場所のダイクシス表現の転換を示す用例

(14a) Mein Rostocker Freund hat mir am Sonntag am Telefon gesagt:

„Gestern ist hier eine große Kunstausstellung eröffnet worden.“

(14b) Mein Rostocker Freund hat mir am Sonntag am Telefon gesagt, am Vortag sei dort eine große Kunstausstellung eröffnet worden.<sup>3)</sup>

(15a) Sabine sagte: „Du sollst das jetzt und nicht morgen machen.“<sup>4)</sup>

(15b) Sabine sagte, er solle das am heutigen und nicht am nächsten Tag machen.

(16a) Anton sagte: „Ich habe den Baum von hier aus gesehen.“<sup>4)</sup>

(16b) Anton sagte, er habe den Baum von dort aus gesehen.

#### ② 場所のダイクシスのみ転換を示す用例

(17a) Ich sagte: „Ich komme morgen.“

(17b) Ich sagte, ich käme morgen.

(18a) Er schrieb: „Ich bin seit drei Wochen hier.“

(18b) Er schrieb, er sei seit drei Wochen dort.

③ 時と場所のダイクシス表現の不転換を示す用例<sup>5)</sup>

(19a) Elke sagte: „Ich kann heute nicht kommen.“

(19b) Elke sagte, dass sie heute nicht kommen kann/könne.

#### 4. 直接話法から間接話法へ転換可能な文と不可能な文

直接話法から間接話法へ転換する場合、全ての直接話法の文が間接話法へ転換出来るとは限らない。本章では、まず間接話法への転換が可能な直接話法の文について述べた後に、間接話法への転換が不可能な直接話法の文とその存在理由について言及する。

##### 4.1 間接話法へ転換可能な文

元々、定形の法が接続法であったものは別にして、定形の法が直説法現在の平叙文と従属文だけである。

(20a) Sie hat mir gesagt: „Ich lese gerade einen Roman von Tolstoi.“

(20b) Sie hat mir gesagt, sie lese/läse gerade einen Roman von Tolstoi.

〈Buscha/Zoch (1999:S.37)〉

(21a) Hans sagte zu mir: „Wenn die Sonne am höchsten steht, ist es Mittag.“<sup>6)</sup>

(21b) Hans sagte mir, wenn die Sonne am höchsten stehe, sei es Mittag.

(20a) の定形の法が直説法現在の平叙文に関しては、傍線部の直説法現在 lese を、(20b) の傍線部の接続法 I 式 lese または接続法 II 式 läse にすれば間接話法に転換可能となる。そして、(21a) の定形の法が直説法現在の従属文に関しては、傍線部の直説法現在 steht と主文中の ist を、(21b) の傍線部のように接続法 I 式 stehe と sei にすれば、間接話法に転換可能となる。

##### 4.2 間接話法へ転換不可能な文

これに該当するのは、疑問文、定形の法が命令法の文、そして定形の法が直説法過去の文である。

#### 4.2.1 疑問文

まず、疑問文についてだが、これに関しては次の (22a) から (22c) を使って述べてみたい<sup>7)</sup> (用例中の太字イタリック体は筆者による)。

(22a) Hanna fragt Peter: „Von wem hast *du* das Buch *bekommen*?“

(22b) Hanna fragt Peter: „Von wem *du* das Buch *bekommen hast*.“

(22c) Hanna fragt Peter, von wem *er* das Buch *bekommen habe*.

〈Klosa (1998:S.780)〉

(22a) の直接話法で示された「誰からその本を貰ったの?」という意味の疑問文 „Von wem hast du das Buch bekommen?“ は、直接話法の語り手である Hanna の質問内容となる。これに対して、間接話法で示された (22c) の「誰からその本を貰ったのか」という意味の „von wem er das Buch bekommen habe“ は、直接話法で示された疑問の内容を再現する語り手の視点から見た文、つまり、Hanna の質問内容の描写となる。要するに、直接話法と間接話法の語り手の視点の違いから、(22c) の間接話法は直接話法の語り手の質問内容ではないことが言える。そのため、代用表現として (22b) のような疑問詞を使った定型文末の埋め込み文 „Von wem du das Buch bekommen hast“ で示した後に、(22c) のような人称のダイクシスと定形の法を換えた形で示される。

#### 4.2.2 定形の法が命令法の文

定形の法が命令法の文、すなわち命令文は次の (23a) の傍線で示された直接話法の文が該当する。

(23a) Der Vorarbeiter befahl mir: „*Erledige* diese Arbeit *heute* noch!“

(23b) Der Vorarbeiter befahl mir: „*Du sollst* diese Arbeit *heute* noch *erledigen*.“

(23c) Der Vorarbeiter befahl mir, *ich soll (t)e* diese Arbeit noch *am gleichen Tag erledigen*.

〈Klosa (1998:S.780)〉

(23a) 中の「今日のうちにこの仕事を片付けろ!」という意味



の „Erledige diese Arbeit heute noch!“ は、直接話法の語り手である Der Vorarbeiter の命令内容となる。これに対して、(23c) 中の間接話法で示された「その日のうちにこの仕事を片付けるよう」という意味の „ich soll(t)e diese Arbeit noch am gleichen Tag erledigen“ は、直接話法で示された命令内容を再現する語り手の視点から見た文、つまり、Der Vorarbeiter の命令内容の描写となる。要するに、直接話法と間接話法の語り手の視点の違いから、(23c) の間接話法は直接話法の語り手の命令内容ではないことが言える。そのため、代用表現として (23b) の „Du sollst diese Arbeit heute noch erledigen“ のような話法の助動詞 *sollen* を使った平叙文の形で示した後に、(23c) の人称や時のダイクシス表現と定形の法を換えた形で示される<sup>8)</sup>。

#### 4.2.3 定形の法が直説法過去の文

最後に、定形の法が直説法過去の文、すなわち過去形は次の (24a) の傍線で示された直接話法の文が該当する。

(24a) Hans behauptet: „Ich wusste davon nichts.“

(24b) Hans behauptet: „dass er davon nichts gewusst hat.“

(24c) Hans behauptet, dass er davon nichts gewusst habe.

〈Klosa (1998:S.779)〉

(24a) 中の「それについては何も知らなかった」という意味の直接話法 „Ich wusste davon nichts“ は、直接話法の語り手である Hans の過去に起こった事象の発言内容となる。これに対して、(24c) 中の間接話法で示された „dass er davon nichts gewusst habe“ は、直接話法で示された過去に起こった事象の発言内容を再現する語り手の視点から見た文、つまり、Hans の過去に起こった事象内容の描写となる。要するに、直接話法と間接話法の語り手の視点の違いから、(24c) の間接話法は直接話法の語り手の過去に起こった事象内容ではないことが言える。そのため、代用表現として (24b) の „dass er davon nichts gewusst hat“ のような、現在完了形を使った文の形で示される。そもそも、現在完了形というのは直説法過去が用いられる過去形の文と同様に過去を示す用法がある。しかし、この場合は終了した事象が現在に残している結果に関心がある場合に用いられる「結果」を示す

用法となるため、(24c) の傍線部の和訳「それについては何も知らなかったという結果」は、(24a) の傍線部の和訳「それについては何も知らなかった」とは若干異なることが言える。

## 5. 直接話法と間接話法の文体的効果

3章と4章でも述べたように、直接話法と間接話法は、聞き手に伝える機能を持つという点では共通している。しかし、両者の違いは直接話法の語り手の発言・思考内容を文字通りに聞き手に伝えるか、そうではないかという点である。直接話法は3.1章でも述べたように、直接話法の内容を文字通りに聞き手に伝える機能を持つ。これに対して、間接話法は3.2章でも述べたように、直接話法で示された内容を直接話法の発言・思考内容を再現する語り手の視点から見た形で聞き手に伝える機能を持つ。要するに、間接話法は直接話法の内容を濾過した形で聞き手に伝えるということである。その顕著な例こそが4.2章で述べた間接話法への転換が不可能な文の存在である。このことから、直接話法と間接話法が示す内容の聞き手に対する印象の度合は、直接話法の方が間接話法よりも強いことが言え、(23a) の直接話法で示された傍線部の内容の方が、(23c) の間接話法で示された傍線部の内容よりも聞き手に強い印象を与えることが考えられる。

(23a) Der Vorarbeiter befahl mir: „Erledige diese Arbeit heute noch!“

(23c) Der Vorarbeiter befahl mir, ich soll (t)e diese Arbeit noch am gleichen Tag erledigen.

## 6. 直接話法が意図的に使われる理由

本章では、1章で挙げた(1)と(2)を含む『トニオ・クレイガー』の一節からの文を基にして、3章と4章で述べた直接話法と間接話法の機能、そして両者の語学的特徴について触れながら検証する。この検証結果から、作者であるトーマス・マンが次の2つの理由から直接話法を使っているのではないのかという点について扱いたい。

- ① 作中人物の会話の場面
- ② 発言を導入する動詞に何らかのニュアンスが加わっているケース

まず、①の作中人物の会話の場面についてだが、これは次の(1)を使って検証する(なお、本章で挙げている用例の和訳は筆者による)。

(1) »Ja«, sagte er (Tonio) , »man isst überhaupt zu schwer hier oben. Das macht faul und wehmütig.«

»Wehmütig?« wiederholte der junge Mann und betrachtete ihn (Tonio) verduzt...

»Sie sind wohl fremd hier, Herr?« fragte er (der junge Mann) plötzlich...

〈Thomas Mann: Tonio Kröger[7.] (2004:S.298)〉

「そうだよ」とトニオは言った。「この辺りの北の地域の食事は全般的に重過ぎです。こういう食事が人をものぐさに憂鬱にするのです」

「憂鬱に?」と若い男は繰り返して言った。そして、若い男はトニオのことを呆気にとられた様子で眺めた。

「御主人、あなたはここの土地の者ではございませんね?」と若い男は突然尋ねた。

(1)の場面についてだが、場面はトニオがデンマークへ向かう船の中。そこで出会ったハンブルク出身の若い商人と夕食で出されたエビのオムレツについて語り合っている内容である。(1)では、トニオと若い商人という2人の会話内容が全て直接話法の形で示されている。なぜこの場面で直接話法が使われているのか。その理由は会話の場面であり、会話というものは聞き手の存在がないと成立しないからである。もし、聞き手が存在しなければ、それはただの独り言であり、会話とは言えない。3.1章で述べたように、直接話法は語り手の発言・思考内容を文字通りに聞き手に伝える機能を持っているため、語り手の発言・思考内容を示すだけでなく、「強調」する機能も持つ引用符という特別な記号が添えられる。これらの理由から、(1)中の全ての文に聞き手が示されていないとしても、直接話法で示された内容は聞き手に強い印象を与えることが言えるのではないのか。もし、この場面を間接話法で示していたとすれば、3.2章で触れた間接話法の機能から、2人の発言そのものではなく、直接聞き手に伝わらず、場面の臨場感が弱くなるため、トーマス・マンは敢えて直接話法で示したと言えるのではないのか。

次に、②の発言を導入する動詞に何らかのニュアンスが加わっているケースだが、これについては(1)と(2)を含む一節を使って検証する。

まず、(1)についてだが、問題となる箇所は3行目と4行目の直接話法である。1つ目は3行目の傍線で示された直接話法「Wehmütig?」を導入する点線部の動詞 *wiederholen* で、この *wiederholen* が示す「繰り返す」という意味がポイントとなる。なぜなら、「繰り返す」という意味は *sagen* の「言う」という意味に「もう一度」という意味が付加されているから、3行目の直接話法は聞き手に強い印象を与えることが言える。1行目から2行目の直接話法は、自分が住んでいるドイツ南部とは違い、胃もたれするような物ばかりを食べているからドイツ北部の人間はものぐさで憂鬱な人ばかりだという、トニオの北部ドイツの食事や住民に関する侮辱的な発言が示されている。これに対する直接話法で示された若い商人の「憂鬱に?」という発言には、北部ドイツのことを貶した聞き手であるトニオに対する若い商人の怒りが込められているため、この直接話法は聞き手に強い印象を与えることが言える。2つ目の4行目の傍線部についてだが、直接話法を導入する *fragen* にイタリック体で示された「突然に」という意味の副詞 *plötzlich* が付加されている。*fragen* の意味「質問する」は相手に何かしらの発言を求める動作を示すため、*fragen* のみが直接話法を導入しても、その直接話法で示された内容は聞き手に強い印象を与えることが言える。4行目では更に副詞が付加されていることから、トニオの北部ドイツに関しての侮辱的な発言に対する怒りのあまり、とっさに直接話法が示す「あなたはここの人間ではないね?」と若い商人がトニオに質問したことが言える。次に、(2)である。

(2) »Adieu, Hans«, sagte Tonio, »es war nett, spazierenzugehen.«

Ihre Hände, die sich drückten, waren ganz nass und rostig von der Gartenpforte. Als aber Hans in Tonios Augen sah, entstand etwas wie reuiges Besinnen in seinem (Tonio) hübschen Gesicht.

»Übrigens werde ich nächstens »Don Carlos« lesen!« sagte er (Hans) *rasch*.

»Das mit dem König im Kabinett muss famos sein!« Dann nahm er (Hans) seine (Hans) Mappe unter den Arm und lief durch den Vorgarten. Bevor er (Hans) im Hause verschwand, nickte er (Hans) noch einmal zurück.

〈Thomas Mann: Tonio Kröger[1.] (2004:S.254)〉

「さようなら、ハンス」とトニオは言った。「散歩は楽しかったね」

握り合った両者の手は庭木戸のためすっかり濡れて茶色になっていた。しかし、ハンスはトニオの目を見た時、トニオの可愛らしい顔には何か後悔の念のような表情が現れていた。

「ところで、近々『ドン・カルロス』を読もうと思うのだ」とハンスは即座に言った。「小部屋にいる王様のことは素敵であるに違いない」その後、ハンスは手提げカバンを脇に抱えて前庭を通して走って行った。家の中に姿を消す前に、ハンスはもう一度振り返って頷いた。

この場面は、主人公であるトニオ・クレーガーとトニオが恋心を抱いていたハンス・ハンゼンが放課後の散歩時にリンデン広場に来て、そのそばにあるハンスの屋敷の前で別れを告げる場面である。別れの挨拶の後、散歩の時にトニオがシラーの『ドン・カルロス』を勧めてくれたことに対してハンスが拒絶の態度を示した。自らの態度によって、トニオの表情がどことなく元気がないと察し、彼の機嫌を直すために、『ドン・カルロス』を読もうというハンスの発言内容が直接話法で示されている。5行目の傍線で示された直接話法を導入する点線部の動詞 sagen はただ「言う」だけではなく、イタリック体で示された「即座に」という意味の副詞 rasch と用いられている。この sagen と rasch の共起によって、トニオの機嫌を損ねたので、すぐに『ドン・カルロス』を読むつもりであることを言って、少しでもトニオの機嫌を直さねばならないというハンスの焦りの気持が直接話法内で示されている。このことから、直接話法の内容は聞き手であるトニオにとって、愛しているハンスが『ドン・カルロス』に興味を持ってくれたという嬉しい内容になり、この直接話法は聞き手に強い印象を与えることが言える。

このような事情から、トーマス・マンは (1) と (2) の問題とした箇所を意図的に直接話法で示していることが考えられる。

## 7. おわりに

本論では、引用形式と関わりのある指示表現、そして直接話法と間接話法の様々な特徴について言及しながら、『トニオ・クレーガー』において、

トーマス・マンが直接話法を意図的に使っている理由について扱った。その結果、作中人物の会話の場面であること、そして直接話法を導入する動詞と副詞との共起などによって何らかのニュアンスが加わっているため、直接話法が意図的に使われているという点を述べた。とりわけ、後者のケースは『トニオ・クレーガー』の中でよく現れるため、本論で扱った用例だけではなく、他の該当する用例を対象にして、頻度調査を含めた更なる検証を今後の課題としたい。

## 注

- 1) 詳細は中島 (2014a) を参照。
- 2) 時のダイクシス表現のみの転換を示す文法書は、今回調査の対象とした文法書の中には存在しなかった。
- 3) 実際には主文が省略されている間接話法の用例が挙げられているが、本論では主文を添えた形の用例にした。
- 4) 実際には主文と引用符号が省略されている直接話法の用例が挙げられているが、本論では両者を添えた形の用例にした。
- 5) Heidolph u.a. (1981:S.823) では、場所のダイクシス表現の用例は挙げられていない。
- 6) この用例は、国松他 [編] (1990:2527 頁) で挙げられている以下の文を基に、筆者が作った文である。  
Wenn die Sonne am höchsten steht, ist es Mittag.
- 7) 疑問詞が用いられない疑問文 (決定疑問文) についての言及は、紙面の都合上省略した。
- 8) 話法の助動詞 mögen を使用するケースについての言及は、紙面の都合上省略した。

## 文献一覧

### 1. 参考文献

- Engel, Ulrich (2009) : *Deutsche Grammatik – Neubearbeitung –*. München : iudicium.
- Ehrich, Veronika (1992) : *Hier und Jetzt*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Flämig, Walter (1991) : *Grammatik des Deutschen, Einführung in Struktur- und*

- Wirkungszusammenhänge*. Berlin : Akademie.
- Heidolph, Karl Erich/Flämig, Walter/Motsch, Wolfgang (1981) : *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin : Akademie.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (2001) : *Deutsche Grammatik Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin und München: Langenscheidt.
- Klosa, Annette (1998) : *Grammatik*. Mannheim: Duden.
- 三瓶裕文 (1994) : 「心的態度, 有標の視点と直接知覚」(千石喬他編)『ドイツ語学研究 2』クロノス. 233-271.
- 中島伸 (2014a) : 「時の指示表現 (die zeitdeiktischen Ausdrücke) を含む体験話法の文体的効果－カフカの『審判』の一節における分析」(日本文体論学会)『文体論研究』第 60 号. 1-15.
- 中島伸 (2014b) : 「間接話法中の時のダイクシス表現－体験話法との関連に触れて－」(ドイツ文法理論研究会)『エネルゲイア』第 39 号. 55-67.
- Schultz, Dora/Griesbach, Heinz (1962) : *Deutsche Grammatik*. München : Hueber.

## 2. 辞典

- 国松孝二他 [編] (1990) : 『独和大辞典』小学館.
- 岩崎英二郎 [編] (1998) : 『ドイツ語副詞辞典』白水社.
- 川島淳夫 [編] (1994) : 『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店.

## 3. テキスト

- Mann, Thomas (2004) : *Tonio Kröger*. In: *Frühe Erzählungen 1893-1912*. S.243-318. Frankfurt a.M.: Fischer.

付記：本稿は、第 109 回トーマス・マン研究会 (2016 年 10 月 15 日, 於：福岡大学七隈キャンパス) と日本文体論学会第 110 回大会 (2016 年 11 月 19 日, 於：愛知産業大学) において口頭発表した原稿に加筆・修正を施したものである。